



社会福祉法人 薄光会 広報紙

ま

ら

め

き



初秋の大山千枚田

第17号

各施設ホームページには、法人ホームページからアクセスしてください。

<http://www.k3.dion.ne.jp/hakukou/>

各施設のホームページにメールボックスがあります。ご意見、ご感想をお寄せください。

平成20年9月20日

社会福祉法人 薄光会 広報委員会発行

本部、豊岡光生園：〒299-1742 千葉県富津市豊岡 3535-1

0439-68-1711

三 芳 光 陽 園：〒294-0825 千葉県南房総市上堀 280

0470-36-3211

鴨川ひかり学園：〒299-2854 千葉県鴨川市代 1297

04-7099-3311

湊 ひ かり 学 園：〒299-1607 千葉県富津市湊 934-18

0439-70-6551

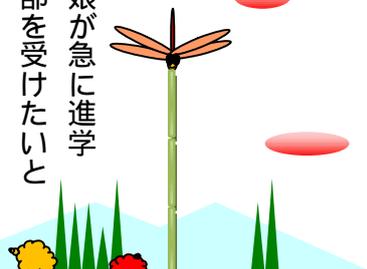
ケアホームCOCO：〒299-1616 千葉県富津市海良 92

0439-67-3380



三重奏組曲

第一



私事である。高校三年の娘が急に進学したいと言い出した。文学部を受けたいと言う。これまで自分の将来について真剣に考えているのかどうか、ダメおやじの私は、ついでに確かめるすべを持ち合わせなかった。娘は、サッカー部のマネージャーに熱を入れだし、高校生活をそれなりに楽しんだ反面、こと将来については、あやふやでぼんやりしているように見えた。

その娘が受験に必要なだからと言って、小論文を書いた。私に見てくれと言う。題材は宮沢賢治だった。友人の死をモチーフにした『銀河鉄道』の夜。幻想的な銀河の旅の中で、「死」と「生」のテーマが奏でられ、賢治世界の曼荼羅が織り出されている。私は、娘へのアドバイスも忘れつつ読んで賢治の作品世界を思い出し、しばし逍遙した。

『春と修羅』『風の又三郎』『グスコープドリの伝記』『なめとこ山の熊』『雪渡り』『よたかの星』『どんぐりと山猫』『セロ弾きのゴーシュ』……。色褪せない瑞々しい賢治の世界がそこにはあった。「無声慟哭」「永訣の朝」……。重くて、しかし、諸共に砕けてしまいうような危うさを持った魂とあがなえない喪失感。果して娘は、この豊か過ぎる賢治世界を旅するだけの

力と感性を持つ人として育っているのだろうか。

第二

賢治の作品に『猫の事務所』というのがある。とある事務所に勤める猫が、ゆえなくいびられ、追い込まれていく話だが、いじめや差別の心理が極めてリアルに描かれていて、傷を負った者にかつての痛みを思いださせずにはおかない物語だ。商人の悪賢い才覚を嫌う賢治には、他者の人格を認めない、いじめや差別に対しても公憤があったに違いない。



公憤という言葉に触発されて、話は飛ぶ。この間、特別支援学校の進路担当の教師が尋ねてきた。重度の障害を持つ生徒の「施設実習」(進路指導の一環で、就労を目指す場合の「職場実習」にあたる。)の依頼である。懸案の問題があった。

この施設実習、学校教育の一環でありながら、施設を使うということで、福祉施策の日中一時支援や短期入所で費用を賄っていたが、市町村が根を上げた。この場合、進路指導なので、日中一時支援は使えないという。そのことを前提の依頼であった。学校を休んで家庭の事情で日中一時支援を使い、それを実習とみなすか、進路指導の費用が出ないので、食費だけお支払いすると言った。

ここで、私のへそ曲がりについて、大いにまくし立てた。「なぜ、いつも障害が重い生徒の実習はその程度にしか考えられないのか。施設に行つて馴染むことだけが目的か。将来のサポート体制を探る第一歩のはず。教師と意見交換しながら「初めての個別支援計画」を考えてこそ、就労を

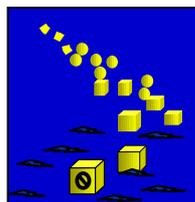
目指す職場実習組みとイコールである。そこに思いがいたらないのは何故？ 食費だけ？ 施設職員を愚弄するの？ 文科省はなにしている？ 教師たちは抗議してるか？ 公憤はないの？……」  
進路担当の教師は困惑を隠さず帰って行った。

第三

寂しさ、むなしさは、熱い思いの影に寄り添う。ケアホーム利用者が盆の帰省で実家に帰ったあと、宵の涼風に誘われて、湊川の灯籠流しを見物にぶらりと外へ出た。河口の橋の上で灯籠が列をなして流れてくるのを佇んでじっと見ていた。

灯籠の列は、はかなげなともし火をかがげる死者の列のように見えた。いのちを燃やし尽くした利用者の顔が浮かんで消えた。

二十八年。豊岡光生園に就労できるまでの二十七年の自分の人生を超えてしまった長い時間を、自分は何をしてきただろうか。自分が熱い思いをぶつけてきたこと、いまもぶつけていること、この事実には間違いは無い。だが、胸のうちにしたい場所を占めて来るこの孤独感は何なのだ。昔聞いた秋田の吟遊詩人友川かずきの歌う激しい歌が蘇ってきた。「生きてるって言うてみる！」



灯籠の列。「銀河鉄道」「星祭の夜」「ジヨバンニ」「カムパネルラ」。たまらなくなつて、橋から去つた。肢体不自由施設の施設内複式学級で、小学部三年の私に静かに微笑をたたえて『銀河鉄道の夜』を朗読してくれた教師の穏やかで優しさに満ちた境地には未だ達することができないでいる。(鳥居)

# 学園新聞

第10号

## 『もうひとつの楽しみ』

今日のおやつは何だろう?と献立表を確認する  
たっちゃん!『何かな?』の問いかけに『みか  
ん!』と元気に返ってきます。

でも、たっちゃんの楽しみはもうひとつあるので  
す……。

『おいしかったあ〜』と言い、お皿とコップをトレ  
ーの上に重ね、その後、席には戻らずに向かう先  
は厨房。

そう! たっちゃんは厨房の職員を観察すること  
がとても好きなのです。

お皿やコップを洗う姿を見て、腕組しながらう  
んうんとうなずいたり、明日の昼の準備で野菜  
を切る姿を見て、『おっけ〜』と言って職員に話し  
かけたりと、厨房の指揮官のようです。

最近は空っぽになった麦茶の容器やゴミ等も進  
んで片付けてくれます。厨房の職員に『ありがと  
う』と言われ、照れながら小声で『おっけ〜!』  
今日もおやつを食べ終わると、厨房に向かうた  
っちゃん。

将来はコックさん?に憧れているのかな?

(確井)

## 『キラキラ笑顔』

マイちゃんのある一日の様子です。

午前の活動が終わって、そろそろ昼食の時間が  
近づいてくる頃、マイちゃんの表情が一段と和み  
嬉しさを振りまきます。いつも活動に積極的に取  
り組み、それはそれは熱心なマイちゃんなので  
が、いつの間にか献立表とにらめっこをするので  
す。(今日のごはんはなにかなあ?)その表情はと  
ても真剣で、ふと見せる笑顔がまたまた印象的な  
のです。

きっと、マイちゃんの大好きなメニューが頭  
中を駆け巡っているのだろうなあ。

マイちゃん!今日のお昼はどうだった?

おやおや、マイちゃん大変だ!おいしい笑顔で  
ほつぺたが落ちちゃいそう!

おなかいっぱいマイちゃんはご満悦の顔で今  
度は大好きなテレビに向かいます。(今日は大好き  
なおじさんが出ているかな?)そんなことを考え  
ながらチャンネルのボタンを押していると……  
高校野球の真つ最中!(私はこれも大好きよ)  
応援のリズムに合わせてマイちゃんの表情もみる  
みるうちに笑顔になっていきます。

『チャリーダーよろしく!』  
(任せてー皆、私を誰だと思いつ?)

さてさて、皆さんお待ちかねのダンスショーの  
開幕です……。

立ちひぎの姿勢で体を上下に動かして、今に  
も飛び跳ねそうな勢いです。マイちゃんの大き  
な笑い声が学園内に響き渡ります。

笑顔が、サンサンと降り注ぐお陽さまのひか  
りのようにキラキラと輝きます。

そうなのです。マイちゃんの笑顔は周りを幸  
せにしてくれるのです。

(大出)



### ひかり農園

利用者だけではなく、畑でも笑顔のよ  
うなキラキラした  
花が顔を出してい  
ます。



## 園だより

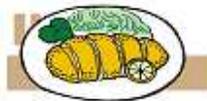
「初恋?」



いつもと同じ食事後の風景に見えた。いや、むしろいつもよりも丁寧に終わった気もする。

「ごちそうさまでした。」

私の声に合わせて、合掌するようなしぐさをした岡田くんは、いつもはブイと食堂から走り去るのだが、この日は少し行き先が違った。



向かった先は、食堂内の流し。普段行くはずのないそんな所に彼が向かった理由は何だろう? その答えはすぐに出た。それと気づいた時、私の胸に驚きと、嬉しさが込み上げてきた。

流しでは20歳の実習生が、台布巾を絞っていた。保育士になるための実習で、2週間の日程のうち2日目であった。初めての施設実習、初めての環境に彼女は緊張していたのだろう。一心に作業を続けている。そんな彼女のもとへ

岡田くんは近づいて行ったのだ。

岡田くんの表情は、実習生に近づくと連れてニヤニヤと崩れ、そっと手を差し出すと、ついに彼女の手を握った。突然の出来事に、彼女は手を握らせたままである。



実習生は20歳の女性。岡田くんとは同世代である。手を握った岡田くんの顔は京劇の化粧のように真っ赤で、これまで見たことがないくらい、本当に嬉しそうであった。

少し戸惑う実習生をよそに、とても満足そうな岡田くんの雰囲気はまさに「恋」を連想させるに十分であった。

「岡田くんの初恋だ!!!」  
大きな声で冷やかした私の声を聞いて、更ににやける岡田くん。目はもうこれ以上無いくらい細くなっている。

「嬉しいの?」

「うん!」

「さんのこと好きなの?」

「うん!」

まだ手を離さない。本当に幸せそうである。

相変わらず戸惑いながら、実習生もしだいに恥ずかしそうな表情になった。

「さん仕事があるから、手を離してあげてくれる?」

私が声を掛けると、とても名残惜しそうに手を離す岡田くん。

食堂を出た岡田くんに

「告白するしかないね。」と声を掛けると

「うん!」との答え。

岡田くんの肩に手を回し、「協力するよ」と約束をしたのであった。

実習生の最終日、職員からの質問で、彼女には付

き合っている男性がいることが分かり、岡田くんの初恋は、あっけなく散るのであったが・・・、(そつえば、その場面に岡田くんはいなかったなあ。予感していたのかな?)

岡田くんにとっては本当に楽しそうな2週間に見えた。

同年代の女の子を過剰に意識するというのは、思春期後期の岡田くんの世代では当然のことであるが、このようなあたりまえの感情が岡田くんにも育っているということ、私は気づけずいた。

壁に穴をあける、ガラスを割ってしまう、2日で短期入所を断られた、不穏時にはこれを服薬させてください等々、鳴り物入りで病院から光生園にやってきた岡田くんのこれまでの生活からは、想像もできなかったことだった。

岡田くんが「異性を気にする・好きになる」なんて場面を、まさか見せてくれるとは思わなかった。けれども、私がそのような岡田くんの姿に驚いたのは、彼のことを見くびっていたからなので、岡田くんにしてみれば、まったく失礼な話かもしれない。

この思ってもみなかった心の成長を確認できたことが、私には本当に嬉しかったのである。

(大森)



## 「らっかせい」の悲劇

(この悲劇は実際に起こった事件を元に再構成してお送りするものです。)

「きやあー」



真夏の太陽が照りつける十坪ほどの畑に、和光保育園の副園長千鶴子先生の悲鳴が響いたのは、豊岡光生園自活訓練棟「のどか」の女性たち五名が職場実習での「本日の仕事」に取り掛かって間もなくの事だった。この女性たちのサポート役、林陽子も、澤田、小布施、小松、澤本、吉野の五名も、何事が起こったのかとぎくりとなつてあたりを見渡した。彼女たちの傍



らに、いつものやさしい表情とは違う顔の千鶴子先生が立っていた。

「えっ?」「??」「?」「皆、きよとんとしている。いつせいに千鶴子先生の次の言葉を待った。むろん、「本日の仕事」草取りの手もびたりと止まった。

「抜いちゃったの・・・」千鶴子先生の声は心なしかトーンが低かった。林陽子は、まだ事態が呑み込めないまま、笑顔で元気良く答えた。

「はいっ!」

千鶴子先生の口元から小さなため息が漏れたように思われた。



「これ、何かわかる?」「草ですよね」林が答えた。

「らっかせいな。」「千鶴子先生は、静かに、しかし、どこか毅然とした態度で言った。

「えっ!」(#%&\$¥#@)・・・」そのやり取りの中、林陽子の狼狽した態度に、「のどか」の五名の女性たちは、いつせいに振り返り、林陽子を見つめた。

(おまえが抜いていいって言ったから私たちは抜いたのよ。どうすんのよ!)

林は、自分を見つめる冷たい眼差しが、身体中に突き刺さるのを感じていた。

(やつぱい・・・)

「のどか」の女性たちは、前回までのお仕事で注意されていたこともあり、踏みつけたりしないようにしていたふしがあったのだった。

林陽子は、この瞬間に何をしなければならぬかを心得ている職員の一人だった。

「自分が悪いんです。自分が言ったから・・・」彼女は、非は利用者には絶対無いことを伝えて頭を下げた。「子供たちには大変申し訳ないことをしました。すみませんでした。」

いつの間にか千鶴子先生は、いつものやさしい顔で微笑んでいた。

「大丈夫よ。」

「植え直ししましょう。」

応援に駆けつけた保育士さんの力も借りて、皆で植え直し始めたのだった。これで、気持ちを何とか切り替えようとする林陽子



に運悪く、第二の悲劇が襲った。

「こんにちは!」

遠くから聞き慣れた野太い声が響いた。

(げっ。この声は・・・。ああ、こ、来ないで!)彼女の切なる願いもむなし、職場実習の様子を見に来た多田次長と大森主事が姿を現したのだ。

(またまた、ピンチ。どぼして、こんなどきに!)「どうした?」次長の声は憎らしいほど涼やかだった。

「抜いてしまつて・・・。らっかせいを。」

「・・・」

あとから来た二人も額に汗して、植え直しは完了した。まだ落ち込んでいる林陽子の胸に、千鶴子先生の言葉が沁みだ。

「今日は、学んだじゃない。次は抜いていいのか、だめなのか、しっかり考えるようになるよね。それが大事よ。考える前に教えてしまつのは簡単だから。でも、そうじゃないよね。らっかせいが実つたら、皆でパーティーしようね。」

(後日譚 植え直されたらっかせいは、真夏の陽射しの中で一部が枯れ、だめかと思われたが、その後、劇的に持ち直して青々とした葉が風に揺れていたのである。おそらく、和光保育園のあるお寺の仏様が力を貸してくれたのかもしれない。林陽子は利用者支援以外の無

関心だった事柄にも関心を向けるようになって、一段と成長を遂げたのだった。)

(原作 林陽子 再構成 鳥居)

らっかせいをぬいてしまつてごめんなさい。もういちどうえなおしました。らっかせい、げんきになあれ! わこつこのこと

たちへ

# COCO de ここ



「どこ行くの?」(MOMO)

休日の朝、みんなが集まって会議が始まる。

「今日は、天気もいいし、出かけようと思っただ、どこ行く?」と職員。「いいねえ」まゆみさんが応じる。「ドイツ村なんてどう?」職員の提案にすかさず「とおいよあ」と、まゆみさん。

「マザー牧場は?」「すぎじゃない。そんな会話をしていると、春男さんは、まだ出かねえなど思ったのか、外に出て草取りを始めた。



「ドイツニーランドに行くには遅すぎるしね」と言っ、少し話の方向を変えてみた。

「市原にショッピングモールが出来たんだよね」「市原はお兄ちゃんがいるところだけど、どこにいるかはわからない」と、まゆみさん。

「そうなんだあ」と、職員。正明さんが会話に入ってきて、「まゆみさんのお兄さんを探しに行くか?」「え? みんなで?」



隣にいた尚子さんが小さくうなづいた。まゆみさん、「やだよあ」。

職員、「……………」掃除を済ませた千代さんが、

「なにやってるんですか」「これこれ」

と笑顔でやってくる。まゆみさんが言う。

「富津公園がいい……………」

「ジュースの販売機もあるし、出店も出てる。食堂でお昼も食べられるし」

「何しに行くの?」「…」「まあ、いいか」「じゃあ、みなさん、今日は富津公園にでかけよ

お」その声に反応して真っ先に立ち上がり、出かけようとする博之さんに

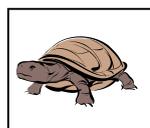
かけられる言葉は、

「まだだよ!」

このようにMOMOの住人会議(議題 …どこ行くのか?)は行われたのであった。(井)



MOMO



カシオペア

「おーい」「おーい」(COCO)

「おーい」「おーい」「あれえ」

「おーい」「おーい」風呂場から呼ぶ声がする。

「おーい」「おーい」職員が慌てて顔を出すと、彼は全裸で自分の股間を指差し、「かいー」。

もうすぐ、お盆休み。母親から連絡があり、帰る日とお迎えの時間を本人に伝える。

彼は嬉しそうに、「はいー」と返事をした。

その日の夜からの入浴時のワンシーンである。

いつもは鳥の行水の彼が、帰省するから、身体を洗ってくれと言っているのである。

帰省する日まであと二週間。きっと毎晩、職員を呼ぶ声が家中に響き渡ることだろう。

「おーい」「かあ〜いいい〜」(井)

修さん、まちの床屋さんへ (COCO)



何度か車で送ってもらっていた床屋さんへ、修さんは、今日は一人で歩いて行くのです。

玄関を出たものの、なかなか前へ進みません。後ろに職員がついてきてくれるのを確認して、ようやく安心顔で出発しました。

両手の細い指先を中空でぶらぶらさせながら、最初の字路にさしかかりました。右へ折ればスパーです。でも、今日は(ひ・だ・り、だよ。修さん!)修さん、両手の指先を見つめながら、止まっ

てしまいました。なにやら考えています。と、修さんの口元がゆるんで「えへへ」と笑つと、足先が右の方へ向きました。本人に任せるつもりだった職員は、つい、声を出してしまいました。

「修さん! ポテチじゃないぜ! 床屋さん!」

ますます口元がゆるんで笑い出した修さん、軌道修正、左へ折れて、こわごわ国道の信号を渡り、床屋さんのドアを開けました。

「あら、いらっしやいませ、修さん」(鳥)



## 『プールでの聖なる儀式』

今年の夏は猛暑で、玄関に設置してある温度計が、三十度よりほんの少しでも下を指していると涼しいと感じていました。自分の感覚がおかしく成りつつある連日の猛暑を乗り切るためには、やはり水が一番ですね。

それでは、プールにまつわる話をします。

### 【その一】



直径三メートル、深さ七十センチの組み立て式のプールは、十二年前中古で載ってから毎年、皆さんの熱った身体を冷してくれています。

真ん中に“でん”と座り込み、職員と顔を合わせない様にお尻をずって回転を続ける大きな背中が妙に気になり、そっと前に回り込みました。

すると嬉しそうに水を掬っては口元へ運んでいきます。その隣では、水に顔を着け続けている人がいました。またその先には、潜りながら何故か口がパクパク動いている人もいました。プールの間中足しても足しても増えない水位。



### 【その二】

各自着替えを済まし、朝の会を終え職員と共にプールへはいる利用者の皆さんは、Tシャツを脱ぎ、上靴を揃え、いざ！プールヘドボンと入ります。

「キヤーキヤー」と水しぶきを浴びて歓声を上げていましたが、思わぬ珍事件が起きたのです。

歓声が悲鳴に変わり「どうしたのかな？」と目を向けると、男性利用者が海パンを脱ぎ全裸でプールへ向かっていました。「これは一大事」と、大急ぎでバスタオルを腰に巻きほつと安心・・・

そのすぐ横で、今まさに海パンをいそいそと脱いでいる方がいました。啞然とする私ですが・・・女性達は「ここはお風呂じゃないわよー」との叫び声に「またまた一大事」とバスタオルを抱えて走りました。

皆さんの仕度も整い私もやる気満々で、利用者の方達に放水開始を告げ、逃げ惑う方や迎える方々に水を掛けまくりました。

「その内、天罰が下るかも・・・」

(中川)



## 『海は広いな大きいな』

毎年の海水浴は、大海海岸で行います。

ペンション「星の砂」さんの御好意で駐車場を貸して頂きバスで出掛けてゆきました。砂浜の直ぐ傍なので、皆さんも迷わず慣れた様子で砂浜を目指しました。

がしかし、途中の“海の家”から食べ物のいい匂いが漂い鼻をくすぐり、皆さんの足は止まり目は匂いのする方へ釘付けでした。

「学園に帰ったらお昼だからねー」という言葉に我に返ったようです・・・(良かった)。

準備運動をして「さあ・・・」と言っている傍から、浮き輪を抱えた昭太さんが砂浜の熱さに飛び上がりながら、海へ飛び込みました。続いて尚貴さん、尾澤さんが、波間をプカプカと気持ち良さそうに浮かんでいます。栄治さん、晋也さん、土井さんは見事な泳ぎで広い海を所狭しと泳いでいました。

波打ち際で砂まみれになりながら、波と戯れて歓声を上げている亮太さん、里菜さん、直樹さんも時には波にもまれながらも、驚きと笑顔の入り混じった表情で波と戯れていました。

ps・海水浴に来ていた方のパラソルの所へ襲撃をかけ浮き輪を失敬して驚かせてごめんなさい。それなのに優しい言葉をかけてくれてありがとう。

昭太より

(川名)

『切られる気持ち・・・』

パソコンに向かっていたら、介護の伊藤さんに声をかけられた。

「園長、爪、見せてください。」

特になんの疑問もなく手を広げて見せる。

「このくらいなら、大丈夫かな。」

「・・・」

「爪切りの練習をさせてあげてください。」

見れば、後ろに採用したばかりの羽山由美さん、十八歳。

手を差し出すと、右手の親指から一本一本、丁寧に爪を切っていく。少し緊張気味ではあるが、着実に進んでいく。

ふと、考える。

自分は、この仕事についてから、何の疑問もなく、入所者の爪を切ってきた。鼻毛も髭も・・・でも、切られる方って、どんな気持ちだったのだろう？

不安？恐怖？喜び？期待？あきらめ？

普通の人って、何が普通だかわからないけど、人の爪を切ってあげることってあるのだろうか？

髭を剃ってあげることって・・・

鼻毛を切ってあげることって・・・

## Shall we dance?

新職や実習の人が来ると、

「じゃ、とりあえず入所者の

爪でも切ってください。」って、

気軽にお願いしてたけれど、そ

れって、すごいことだったんじゃないのかな。

「とりあえず」って、呑み屋でビールと枝豆頼

むのと違うもんな・・・

そんなことを考えていたら、爪切りは無事に

終了。落合さんが次の研修先となった。

「園長、次は髭をお願いします」とのこと。

「・・・」

不安？恐怖？喜び？期待？あきらめ？

自分は・・・

喜びが、一番大きい・・・かな？

あ、いやな年寄りになりそう・・・

(不届きな施設長)

クイック、クイック、スロー。

スロー、スロー、クイック。

先生の掛け声に合わせて、華麗なステ

ップ(?)を踏む女性入所者四名

「園長せんせ、ダンスが習いたいのに！」

という声を断りきれず、施設の近くを探

していたら、たまたま見つかったダンス

スクール。



断られるのを覚悟で

連絡してみると、受け

入れOKの返事。七月から週一日の予定で、

ダンスのグループレッスンに励んでいる。

先生曰く、

「ワルツくらいは踊れるようになるかな？」

とのこと。

やる気は十分。みんなレッスンの時間にな

るとお化粧をして、レッスン場に飾ってある

ダンスの衣装に目を輝かせている。

この調子でいけば、華麗なステップが踏め

るようになる日も近いかも。

華麗なステップ、加齢なステップ、どちら

でも良いから、とにかく楽しくいきましょう。

(ダンス教室引率者)

### 【編集後記】

赤い羽根共同募金の配分に

より、豊岡光生園に車いす対

応りフト付きの車両(トヨタ

ハイエース)の整備をさせて

いただきました。

(配分金二百二十四万円)

ありがとございました。

大切に使用させていただきます。

ようやく秋らしい風が吹いてきました。初秋の南房

総よりきらめき第十七号をお届けします。

